

【1学期の教育活動全般を通して、良かったことについて】

(稲梓小)

○学校重点目標「わくわく チャレンジ 楽しい学校」を子供たち自身が実践し、生き生きとした活動、取組が数多く見られた。子供たち自身が楽しい学校づくりをしているように見えた。

(稲生沢小)

○学校教育目標の具現化を図るために、2つのプロジェクトが両輪となり、日々の授業や行事に取り組むことができた。4月に新しい教職員集団になったが、温かい人間関係が構築されつつあり、その雰囲気の子供たちの成長や落ち着いた学びの環境づくりにつながっていた。(学校の取組や子供たちの成長が地域・保護者に伝わり、理解と協力を得ることができた)

(白浜小)

○「わたしもたいせつ あなたもたいせつ」を合言葉に、同じ方向性で充実した教育活動を展開することができた。
○体験プログラムによる活動がスタートしたが、地域の教育資源を活用した体験活動を推進するにあたり、とても助かっている。地域の自然や人と関わりながら学ぶことは、その子の成長の確かな土台になると考える。

(浜崎小)

○魅力ある授業づくりを目指し、専門人材を活用して授業づくりを計画することができている。陶芸、東北大学「結」プロジェクト、水泳など、講師を招いて授業を実践できおり、子供たちは専門人材からコツや楽しさなど、活動を通して生き生きと学ぶことができています。また、総合的な学習の時間など、探究的な学びのために、体験活動や外部人材を活用した授業を展開しています。これも、市から「講師謝礼」「グローバル City 補助金」「教科指導相談員制度」などの補助金を活用できていることにより、学校の教職員だけではできない魅力的な授業が展開できています。
○学校司書の配置により、子供たちが興味関心をもつ新刊図書の整備や、本の紹介などの掲示物などを工夫してくださり、子供たちは休み時間などに図書室に行き本を借りるのを楽しみにしている。
○ALT や、特別免許状を有する外国語教員を配置していただいていることで、子供たちは、専門人材から、楽しく外国語を学ぶことができおり、魅力的な授業づくりの一つとなっている。

(下田小)

○地域と連携し、地域人材を生かした教育活動に取り組む体制が整ってきた。魚釣り名人と一緒に釣り体験(特別支援学級2組5・6年)その後感謝の会への招待、シーカヤック体験(4年)などの体験活動、地域の方を講師に迎えたクラブ活動の実施(将棋クラブ、自然観察クラブ、下田伝統芸能クラブ、サッカークラブ)、総合的な学習の時間、生活科にて、地域体験学習を実施(旧下田町内の散策、旧町内名石碑オリエンテーリング実施、半田屋さん見学、町探検やインタビュー)に行った。これらの活動により、地域の方の力を借り子どもたちとのかわりができたことで、地域の方に対し親しみや、もっと地域を知りたいと思う気持ちが育まれた。家庭や地域との連携が推進され、下田のよさを共有する学習が増えうれしく思う。子どもたちの意欲も高まっているので今後も継続していきたい。
○英語力向上プロジェクトにおける玉川大学との交流を実施した。子どもたちは、学生による外国語の授業に楽しみながら参加し、英語のコミュニケーションへの関心が高まった。学生にとっても、子どもたちとの直接的な交流が教職へ意欲を高め、双方にとって有意義な機会となった。
○黒船交流会は学校の受け入れ準備に負担感はあるが、子どもたちにとっては、体験的な交流活動により異文化に触れる貴重な体験の場となっている。子どもがイベントを企画することで、表現力や主体性を育む場ともなる。

(大賀茂小)

○子供たちが落ち着いて学校生活を送ることができている。

(朝日小)

○運動会では、地域・保護者など多くの方々の参加が得られた。授業参観など、多くの保護者が来校し、熱心に参観する姿がみられた。
○市の予算で、1・2年生の野菜作りと販売実習や3年生の海亀学習と水族館見学などの体験活動が充実している。
○4年生の福祉学習、5年生の防災学習も外部(社協、危機管理局など)と連携しながら進んでいる。

(下田中)

○救急搬送や生徒間トラブルもあったが、全体的には心理的にも身体的にも安全に学校生活を送れていた。特に不登校生徒が少なく、休まず学校に来る生徒が多かった。

【学校間交流や地域、多文化交流等の実践について】

(稲梓小)

○宿泊交流において、白浜小、大賀茂小と交流活動ができた。二学期も交流活動が予定されていて、計画的、積極的に進められている。

(稲生沢小)

○6年生が新庁舎開庁式に参加したり、庁舎見学をさせていただいたりしたのは、庁舎を身近に感じたり社会で学んだことを結び付けて考えたりするよい機会となった。

(白浜小)

○「富士山静岡交響楽団演奏会」を主催し、市内他校及び保護者、地域住民の参加を募り、共に素晴らしい演奏を聴けたことは有意義だった。特にその場で交流をしたわけではないが、価値ある体験をより多くの仲間と共有できたところに価値があった。

○5年生が、市内他2校と同日程で宿泊学習を行った。白浜の観光協会の方々の全面的な協力を得て、悪天候だったにもかかわらず充実した体験交流をすることができた。

(浜崎小)

- 子供たちは水兵さんとの黒船交流会を楽しみにしており、英語、合唱、音楽やダンスを通して楽しく交流することができた。給食のあと、昼休みにには一緒になって外で遊んでくれるため、遊びを通してコミュニケーションを楽しむことができた。特に今年は、明るく、子供たちとのコミュニケーションを大切にしてくれる水兵さんが来てくれたので、子供たちを盛り上げてくれたり、子供たちに対して楽し気に反応してくれ、例年になく楽しい交流会となった。
- カザフスタン国際交流では、日本語を学ぶ学生たちから、カザフスタンの国や文化について、スライドを使って日本語でわかりやすく説明してくれたので、子供たちは興味を持って話を聞くことができた。また、民族衣装を身にまといカザフスタンの民族楽器を演奏してくれたので、文化を肌で感じるができる機会となった。
- 下田中学校のスクールバスを使って、白浜から稲梓までを周遊しながら、下田のまちの特徴(市内の交通、土地の利用)について学ぶ社会科の学習では、途中、(稲梓小)学校に立ち寄り、同学年の3年生と昼食を共にしながら交流することができた。学区の地域性の違いを学んだり、他地域で学ぶ同学年と交流したりするよい機会となった。
- 7月2日、3日、5年生は地域について学ぶ宿泊体験活動を行った。生涯学習課に依頼し道の駅にて下田の歴史学習、マリンネットに依頼して白浜マリーナのサップ体験、須崎青年部に依頼して船釣り体験、地元講師に依頼しいけんだ煮味 噌づくりなどを計画した。宿泊先は、須崎の民宿小はじに依頼した。しかし、天気予報が悪く、天候が悪かったため、急遽、予定を変更し、水族館のバックヤードツアー、漁師によるロープワーク講座、釣り師によるサビキ作りなどを行った。下田市グローバル City 補助金を活用させていただいていることで、地元の産業、観光、歴史、食文化など、地元の人との触れ合いを通して充実した学びを展開することができている

(下田小)

- 市校長会や小学校魅力化検討会議において学校間交流の重要性を共通理解し、実施できるところから取り組んでいく予定である。本校は単独でも活動が成り立つ規模であるため、他校との共同実施活動が少ない点が課題である。今ある活動に、プラスする視点で、小学校同士また中学校との交流を進めていきたい

(大賀茂小)

- 小学校在り方検討会からの提言を受け、各小学校の在り方が「七色の小学校」「学校群」というベクトルで市内小中学校が連携・協働して改めて歩み始めていると感じられる。また、グローバル CITY プログラム事業について補助を継続・充実していただくことで、下田の子供たちの体験活動が豊かに展開されている。
- カザフスタンのインターン実習生との交流をさせていただいた。子供たちには大変貴重な経験となった。このように多文化交流の機会をいただけることは大変ありがたいことであるので、できるならば、前年度から計画的に位置づけ発信していただけると、学校側も年間計画に位置づけ交流がさらに充実すると思う。また、姉妹都市(今年は沼田市との60周年)との交流をすすめたいが、あちらのニーズや学校の様子がわからないので、声をあげにくい現状がある。

(朝日小)

- 黒船交流会では、積極的に交流しようとする姿が多くみられ、楽しい交流会となった。
- 保護者が通訳として交流会を支えてくれた。協力してくださる保護者や地域の方々が多い。

(下田中)

- 昨年度、文科省表彰をいただいたキャリア教育については、学校運営協議会の皆様を中心に下田中独自の取り組みが今年度も進んでいる。特に総合的な学習の一環で実施するキャリア座談会は多様な講師の方々に来ていただくことが決定している。
- 7校の小学校から生徒を迎える特異な環境であるため小中交流が進んでいなかったが、学校校運営協議会の公開や2学期に実施するUD 避難訓練への参加の呼びかけ等を進めている。(UD 避難訓練については、市役所、警察、消防署、社会福祉協議会、災害ボランティアに加え今年度は、2小学校と特別支援学校が参加の予定)
- 沼田市の中学校から姉妹都市交流として何かできないかと相談されたため、オンラインでの交流を行うこととし、2月に行う学習発表会を交流の場にしようと準備を始めた。

【ICT 教育の実践について】

(稲梓小)

- 授業において、必ず ICT 機器を先生方が導入、課題提示等で使用し、子供たちも調査やまとめに活用するなど、個別最適な学びに近づけることができた。

(稲生沢小)

- 今年度、タブレットが新しくなるとともに、Google アカウントが全員に付与されたことにより、活用の幅が広がった。

(白浜小)

- 設備の整備及び物品の確保をいただきありがたい。どの学年でも日常的にタブレット端末や電子黒板等を活用するようになっている。
- 宿泊体験前に ICT を活用して事前に顔合わせをするなど、交流の際にも活用され始めている。今後、内容によってうまく使い分ければ、交流を進める効果的な手段となると思われる。

(浜崎小)

- ICT 機器を新しいものにしていただき、機動性や使い勝手がよく、教師も子供も大変授業がしやすくなっている。機器が優れているため、子供も教師もストレスなど使用することができ、子供の思考の流れを止めることなく、筆箱と同じようなツールとして利用できるようになっている。

(下田小)

- 一人1台タブレットの効果的な活用事例が増えている。総合的な学習の時間の調べ学習の際、教育DX 吉田さんから子供たちに調べ方を教えてもらった。覚えたやり方が、他教科でも役に立った。(3年)

○書くことが苦手な子や宿題になかなか取り組めない子が、タブレットを使った学習により楽しく取り組めるようになったとの保護者からの声があった。タブレット使用のルールは、年度ごとに確認が必要。iPad が新しくなり、使用について実態調査アンケートを取るなどして、状況を把握するのも今後の使用に役に立つかもしれない。

(大賀茂小)

○下田市には、DX アドバイザーが配置されていて、子供たちや教員のやってみたいことへ挑戦するバックアップ体制が整っている。今配属されているアコーディスの吉田さんも、地域や各学校、先生方児童・生徒のニーズの把握に努めてくださり、困ったときにも、新たな挑戦をしたいときにもそれぞれの学校を訪問し、アドバイスして下さることで安心して教育実践を重ねることができている。人的配置は非常に有効である。今後、他地域、学校間交流などがますます広がっていくことが予想されるので、ぜひ DX アドバイザーの配置の継続をお願いしたい。

(朝日小)

○児童と教員のタブレットも新しくなり、キーボードもついているため使いやすくなった。

○「CANBA」を使っの学級だより作りも定着し、見やすく楽しい便りとなっている。

(下田中)

○端末の利用が日常化してきている。

○校務や生徒の GIGA ネットワークの障害がおこる頻度が多い。もともと通信速度が遅いためストレスを感じているが、回線自体が切れてしまうこともあったため授業や校務に支障が生じるため改善をお願いしたい。

【いじめ問題対応や不登校対応について】

(稲梓小)

○SC、SSW が不登校児童や保護者にかかわってくれていることやこども家庭課が家庭支援を行ってくれたことが、学校の助けになっている。

(稲生沢小)

○担任だけが抱え込まず、生徒指導主任が中心となってチームで対応できた。

(白浜小)

○定期的に「生徒指導会議」を行い、全職員で全校児童の現況を把握し支援する体制を整えているので、児童一人一人に対してきめ細かい指導ができている。また、1学期に、この会に本年度より勤務している SC を招き、今後の適切な支援法及び助言をいただけるよう配慮することができた。

(浜崎小)

○こども家庭課が設置され、よりよい連携の仕方について、学校への聞き取りをもとに組織や仕組みなどの改善に取り組んでくださっている。垣根が低くなった感じが強い。今年度からは、学校の困り感に対して強力なバックアップをいただけるようになった。学校は子供に対しての支援と保護者へのアプローチ、こども家庭課は保護者への支援やアプローチなどを明確に役割分担をしながらも、情報共有を密に取りながら、学校と外部機関が協力して課題解決に向かえるようになってきている。同様に、児相も、連携しやすくなっている。そのことにより、子供が登校するようになり、保護者の子どもへのサポートや家庭環境の改善など、よりよく変化し始めていることが、実感できるようになっている。

(下田小)

○ランドデザインに明記した、全ての子供を全職員で支える体制が整い、案件に対し迅速に組織での対応が取れるようになった。学校評価においても、管理職への報告、素早い組織対応が早期の解決につながったとの声が複数あった。教務、生徒指導主任、特支コーディネーターの主体的な姿勢が影響している。また、SC、SSW との共通理解や連携が図れたことにより、より適切な保護者対応や子どもの理解につながった。

(大賀茂小)

○本校では対象事案がなかったが、体制として「適応指導教室」が「支援センター」となったこと等様々な対応がなされており、環境が整えられとてもよいと思う。もっと PR していただければと思う。

(朝日小)

○担任がアンケート等を通して、子供たちの生活に寄り添った指導を進めることで早めの対応ができた。

○対応が難しいものは、SC や SSW と連携し、市(こども家庭課)と協力しながら対応できた。

(下田中)

○不登校生徒は数名いるが昨年度不登校気味だった生徒が特別室登校になったり(教科によっては教室に入ることもあり)、行事には参加できたりと比較することに意味はないと思うが昨年度より学校に登校できない生徒数は減っている。

○いじめに発展する人間関係のトラブルは 1 学期の間にもいくつもあったが、本人たちへの聴き取りや保護者への連絡等、非常に丁寧な初期対応ができた。

【コミュニティ・スクールの取組について】

(稲梓小)

○学校の困り感をコーディネーターにお伝えしているが、適切な人材を確保していただき、助かっている。一学期は、読み聞かせ、放課後の児童の見守りをお願いしたが、適切な地域の方を見つけてきていただけた。

(稲生沢小)

○第 1 回の学校運営協議会で、推進委員と各担任が協議し、1 年間の地域交流計画が立てたことにより見通しがもてた。

(白浜小)

○学校運営協議会や白浜地域学習を進める会等と協力体制をとり、地域と密接なつながりをもって教育活動を進めている。

(浜崎小)

○敷地が広いので、草刈りをお願いするようにしている。

(大賀茂小)

○各校でそれぞれ軌道に乗り工夫・特色がみられるようになった。「好き」を伸ばし、未来を創る子供の育成のためにも、コミュニティ・スクールの力を得て、地域の人・もの・ことを活かすことは、これからますます重要である。

(下田中)

○令和8年度も職場体験活動やキャリア座談会の企業紹介、講師紹介を委員の方々が主体的に進めており、学校だけではできないことも実現する等、教育効果が高い。

【その他、学習面、生徒指導面、学校運営に関することについて】

(稲梓小)

○本校は地域との結びつきが強いので、学校運営に理解と協力をいただいている。大変助けられている。地域の方の支援を得ながら、ウナギもじり体験、アユ釣りなど、地域の材を生かした郷土理解やキャリア教育を深める活動を行うことができた。

(稲生沢小)

○各学年(学級)の人数が20人程度いるため、活気があり、集団の楽しさを味わうことができる環境である。

(白浜小)

○大きな事故、怪我等なく1学期を終えることができた。

○物価高騰の中、給食センターでは、よく日々の給食を運営していると思う。感謝しています。

○台風6号や津波注意報の発令などを通して、各校で防災や体制について考えたり、対応について市内各校で情報共有したりと、意識をもって取組を進めることができた。ひとつひとつ対応事例を積み重ねていくことで、各校の防災力が高まると思う。

○学校司書を配置(巡回)してくださっていることは、読書環境の充実のみならず、本のおもしろさを子供たちに伝えるために、大きな効果をあげている。

○ALTはよく子供たちのことをわかってくれており、日々の外国語活動・外国語科の授業だけでなく、ダンス指導や交流活動時のサポートなど、さまざまな場面で学校を助けてくださっている。今後、県費の非常勤講師(英会話)がなくなっていく方向だと思われるが、市費によるALT(小学校外国語活動・外国語科指導助手)の配置を堅持してほしい。

(下田小)

○伊豆下田分校との共生共育が、本校の教育活動にプラスに影響している。

○特別支援教育の視点を全職員が共有し、児童理解や生徒指導に当たることができている。

(朝日小)

○「全国学力・学習状況調査」に学習への取り組みの成果が表れてきていることが感じられた。

(下田中)

○総合学習をはじめ多くの方が学校教育に参画してくれており、非常に助かっている。

○各小中学校ともインフルエンザ等による学級閉鎖、学校閉鎖はなく、休校は大雨による6/3の1日のみであった。各校とも学校教育目標の達成のために日々の授業や各種行事・諸活動を概ね予定通り実施している。学校を訪問する度に子どもたちの元気に過ごす姿が見られ、全体として落ち着いた学校生活を送ることができている。

○今年度から下田市の教育大綱が新しいものとなり、それに沿った学校教育の基本方針が、新しい学習指導要領の理念や、下田に関わる様々な立場の大人が集まって話し合ってきたボトムアップ型のビジョンであるため、学校がやりたいことが実現しやすいという声も上がっている。下田グローバルCITYプロジェクトによる、下田の豊かな自然を体験、味わうことができる地域での活動など、これまで以上に地域の方に活躍していただきながら充実した活動ができている。毎年子どもたちが楽しみにしている黒船祭交流会をはじめ、英語力向上プロジェクトや演劇、音楽交流など玉川大学との連携協定締結10周年という節目の年でもあり活発に児童生徒との交流が行われている。また、日本国際交流発展促進協会カザフスタンインターンシップ生との国際交流、上智大との交流など国際的な視野が広がるような活動も昨年度に引き続き企画課に力を借りながら進めている。

○学校間の交流が積極的に進められ、小規模でも魅力ある小学校を目指して学校経営しているが、様々な交流活動を推進する際、移動手段については常に課題となっている。(使用時間や使用機会において下田中スクールバス2台のみであると、今以上に交流活動を推進することが困難となってくることが予想される。)

○地域活性化企業人(DXアドバイザー)との連携による教育DXの推進は、着実に進んでおり、各校ともタブレット端末の効果的な活用が進められている。各校ともDXアドバイザーを頼りにしており、勤務日数増加を求める声が多い。

○コミュニティ・スクールは中学校で4年目、小学校で3年目となる。下田中学校では、総合的な学習の時間を中心に地域と一体となって活動が進んでおり、職場体験活動やキャリア座談会の企業紹介、講師紹介を委員の方々が主体的に進めており、学校だけではできないことも実現する等、教育効果が高い実践を重ねている。小学校では、それぞれの地域の強みを生かし、各校の環境整備や体験活動等地域と連携した取組が進んでいる。しかし、小中学校とも各校で担当(教頭や教諭)がおり中心となって進めている状況である。他市町ではコーディネーターあるいはCSディレクターを配置して教職員の負担軽減を図っている自治体が多くなっている。本市でも配置する方向で検討を進め、持続可能な体制を整えていきたい。